

## 地域情報（県別）

## 【鳥取】男女問わず、気軽に不妊治療について相談できる社会へ-飯塚敏子・鳥取県西部不妊専門相談センター相談員に聞く◆Vol.2

2020年10月2日（金）配信 m3.com地域版

専任の不妊症担当看護師が中心となって、不妊治療の無料相談に対応する米子市の鳥取県西部不妊専門相談センター。デリケートな問題ゆえの相談までのハードルの高さなど、課題と対応を当センター相談員の飯塚敏子氏に取材した。（2020年7月20日オンラインインタビュー、計2回連載の2回目）

▼第1回はこちら



センターが入るミオ・ファティリティ・クリニック外観

## ——鳥取県は共働き率が高いですが、仕事との両立の相談は多いですか。

不妊治療が始まると治療のために頻繁に通院する必要がありますが、最近は職場の理解が進んで両立している方が増えているように感じます。しかし通院先が職場の近くならいいですが、遠方になると仕事を休まざるを得ませんし、治療が1回で成功するとは限りませんから、「仕事を辞めようか悩んでいます」という相談ももちろんあります。

不妊治療は期待が大きい分、成功しなかったときのご本人の気持ちの落ち込みも大きく、パートナーや周りの人たちに支えられて治療を継続できていると感じます。医療側としては先端の医療を追求して、クオリティーの高い診療を提供し、一人でも多くの方を笑顔にすることが大切だと思います。

## ——不妊治療は治療費の負担が大きいイメージがありますね。

やはり治療費の問題は皆さんが気になることですから、たくさんの相談があります。ただ鳥取県は子育て支援に力を入れていて不妊治療の助成額がかなり増えたので、昔の助成金がなかった時代と比べると、大幅に金銭面の負担が減りました。とはいえ回数、年齢、所得の制限があり、制限回数の中で治療が成功すればいいですが、そうではない人もたくさんいますし、制限年齢を過ぎても治療を継続したいという人もいます。ですからもっと助成のハードルを下げたいという思いもありますね。



対面相談の様子

—情報の発信や啓発のために、何か活動をしていますか。

県西部や中部で、「妊活フェス」というものを年に数回、ミオ・ファティリティ・クリニック（MFC）と共催しています。妊活フェスは、大きなイベント会場やホールで開いているというわけではなくて、地域の方が気軽に立ち寄れるように公民館などの公共の場所を使い、講演会や個別の相談会を催しています。不妊治療を受けていることを周囲に隠している人もいますから、最初は身近な場所での開催に不安がありましたが、いざ開催してみると思った以上に人来りただけて手応えを感じています。

また、不妊治療を考えているご本人だけでなく、「遠方に嫁いだ娘の代わりに話を聞きたい」というような娘さんの代理でお母さんが参加することが多いのも妊活フェスの特徴です。昔は「子どもはまだか」といった親や親せきからのプレッシャーもありましたが、最近は親世代の理解も進んで、夫婦のプライベートに関して意見する人はかなり減っていますから、娘さんからお母さんに相談されるなどして来ているのだと思います。

本当は今年も春に開催する予定だったのですが、COVID-19の影響で中止になってしまいました。状況を見て再開する予定なので、身近な場所で、多くの人に気軽に来ていただきたいです。

—出張相談やイベント等でCOVID-19の影響を受けているようですが、相談業務への影響はありましたか。

今すぐ治療を始めたいという相談は減りましたが、治療を始めるまでの間にいろいろな情報は集めておきたいという人が多いので相談件数自体は減っていません。変化としては、以前から検討していたオンライン相談を、これを機に導入したこと。始めたばかりでまだそれほど多くはないのですが、実際に顔を見て話すと相手の表情がわかって便利です。

また対面相談も継続しているので、消毒、検温、2週間以内に旅行などに出かけていないかといった確認は徹底して行っています。

—多くの相談を受ける中で感じる課題と、今後の方針を教えてください。

昔と比べれば不妊治療に対するハードルはかなり低くなったと思いますが、まだまだ相談をためらっている人は多いと思います。開設当初と比べて相談件数が増えたのは、鳥取県西部不妊専門相談センターの認知度が上がったことに加えて、相談しやすい環境が整ってきているからでもあると思います。男女を問わずもっと気軽に相談してもらえるように、私たちも情報を発信していく必要があると感じています。

またMFCでも地域の小学校やPTAに性教育の出前授業を開いていますが、今は早い段階から性教育が行われるようになりました。これは不妊治療のためにも非常に良い傾向だと思います。幼いころに性に関する情報を隠して、大きくなってから教えると特別感が出てしまいますが、子どものころから卵巣にある卵子が命の源になっていることや、卵子は老化し、毎月数が減っていくことを当たり前のこととして知っておけば、将来はもっと気軽に相談や治療ができる社会になるのではないのでしょうか。

◆飯塚 敏子（いづか・としこ）氏